

日本の文化パワーは移民政策をすすめる推進力

坂中英徳

日本文化は世界の人びとが愛する普遍的文化

大相撲、歌舞伎、宝塚歌劇、京都祇園、金閣寺、奈良、東大寺、鎌倉の大仏、伊勢神宮、出雲大社、皇居、銀座、高山祭り、青森のねぶた、博多祇園山笠、徳島の阿波踊り、札幌の雪祭り、東北の温泉郷、沖縄のサンゴ礁の海、大阪城公園、姫路城、名古屋城、富士山、阿蘇山などは外国人観光客のみならず移民が憧れる観光の名勝である。日本の伝統文化は日本に永住する移民にとって身近な存在であり、魅力的なものである。

以上に掲げる伝統文化と観光名所を守る人材の確保を真剣に考える必要がある。少子化で後継者難が急激に進む日本では、日本の若者だけで日本文化を維持することは不可能だ。日本文化の精髓を理解する世界の若者の中から日本の伝統を引き継ぐ人材を育てれば後継者問題は解決する。それだけではない。日本文化の普遍性が高まり、世界の人びとが愛する世界文化遺産に発展する。

時代は変わった。今や、日本文化は「日本人がひとりじめするもの」ではない。「世界の人びとのもの」である。漫画文化やカラオケ文化や居酒屋文化は世界の多くの人から愛される普遍的文化である。また、日本の文化パワーは日本型移民政策をすすめる推進力になると考えている。

モンゴルの横綱もいい。青い目の芸者もいい。アジアの美女がそろそろ宝塚歌劇もいい。世界の若者が博多祇園山笠でみこしを担ぐのもいい。色とりどりの民族衣装に身を包んだ男女が阿波踊りで踊り狂うのもいい。居酒屋で多彩な顔の面々が日本酒を飲み交わし談笑するのもいい。

みこし担いだり、踊ったり、酒と一緒に飲んだりする地球人たちが、異なる民族の心が溶け合ってひとつになる至福の境地にひたっている光景を想像するのは楽しい。その時つつかの間ではあるが、人びとの心に人類同胞意識が生まれているのではないか。

世界の若者を感動させる祭り・食文化などの文化材や里山・棚田などの自然景観は全国いたるところにある。世界の人びとを日本に引き寄せる文化遺産や自然遺産を発掘し、世界に発信しよう。その役割を在日外国人に任せてはどうか。世界的視点で日本の好いところを発見し、世界に広めてくれるだろう。

外国人観光客の飛躍的増加は移民立国への追い風

政府は2020年に年間2000万人の外国人観光客を招く「観光立国」を目標に掲げ、査証を免除する国を大幅に拡大するなど、外国人観光客を増やす政策を推進している。

昨年は1300万人の外国人観光客が日本を訪れた。本年も増加の勢いが止まらず、1500万を上回ると予想されている。観光の名勝や日本文化は外国人観光客をひきつけるパワーがあるから、2020年の東京オリンピックの年に3000万人を超えるのも夢ではないと思う。

外国人観光客の飛躍的増加は移民政策の推進に絶大な効果をもたらすと考えている。外国人観光客が増加すれば、日本が好きになる外国人やリピーターの外国人、日本への移民を希望する外国人の増加に拍車がかかる。日本人と外国人が親しく接する機会が増し、移民の受け入れに対する国民のアレルギーが弱まる。

たとえば、最近、居酒屋で日本人と外国人観光客が酒を飲み交わしている光景をよく見かけるが、外国人に親近感を覚える日本人が増えれば移民立国への追い風になる。

私は50年間で1000万人の移民を迎える「移民立国」を提唱しているが、外国人観光客のなかに日本での生活や日本の文化に憧れる移民希望者が数多く含まれていることはいうまでもない。

2020年の東京オリンピックの開催を前に政府が移民国家宣言を世界に向けて発表すれば、オリンピック見物で日本を訪れる3000万人の外国人観光客のなかから日本への移民を希望する世界の人材を多数獲得できる。

日本文化に憧れる若者は世界中にごまんという

日本の国技である大相撲を支えているのは外国人力士たちである。日本国民は、日本を代表する伝統文化が外国人によって守られている現実を直視しなければならない。いち早く外国人に門を開き、実力が物を言う勝負の世界の大相撲だからこそ、時代を先取りした外国人進出現象が生まれた。

大相撲は「外国人に開かれた日本」の象徴としての役割を見事にはたした。世界各国からやってきた外国人力士たちは日本国民の好意的な外国人観の形成に貢献した。

日本の命運を移民立国にかけるというのであれば、日本は世界の若者の立身出世の夢がかなえられる国に変わらなければならない。めざすべきは、国籍・民族を問わず、すべての人に機会均等を保障し、能力主義で人間を評価する「自由競争の社会」である。大相撲の世界がその良きモデルだ。

大相撲における外国人の圧倒的な存在感が雄弁に物語るように、日本の伝統文化を受け継いで後世へ伝える人は何も日本人に限られるわけではない。アニメ、ファッション、文学、歌舞伎、禅、工芸、料理など、日本文化に憧れる若者は世界中にごまんという。なかには日本の若者よりも日本文化の精髓を理解している外国人もいる。

後継者難の伝統工芸や伝統芸能の分野でも、日本が大好きな外国人や日本文化おたくの外国人に活躍の場を提供すれば、彼らが伝統文化の保存・発展の一翼を担ってくれるだろう。

法務省にお願いがある。日本の伝統工芸・伝統芸能の技能を継承する外国人を移民として迎えるため、「伝統工芸技能」の在留資格を新設してほしい。

移民時代の日本語のあり方について

日本人と移民が共生する社会をつくるためにも、移民に対する日本語教育が重要である。日本語のできる外国人となら、日本人はすぐにうちとけ親しくなる。日本語をマスターした外国人は、日本的思考や日本の美意識をある程度理解できるようになる。さらに努力すれば、日本の知識人と五分の議論ができるようになるであろう。あるいは、日本人の行動美学に共鳴する外国人、心は日本人よりも日本人の外国人が現れるかもしれない。

移民が日本社会の多方面で活躍するためにも、日本の土地になじんで幸せに暮らすためにも、日本語が話せるだけでなく、一定の読み書き能力が不可欠である。

世界各国の人びとが使う「にほんご」の視点から、移民時代のコミュニケーション手段としての日本語のあり方を真剣に考える必要がある。人材育成型移民政策の大黒柱である日本語教育制度の充実・強化は待ったなしだ。たとえば、経済連携協定による看護師、介護福祉士の受け入れで明らかになったように、移民受け入れの成功の鍵は日本語能力にある。農業、工業など就労分野が変わっても移民政策における日本語のもつ重要性は変わらない。

日本語教育はボランティア任せではいけない。外国人に速く正確に日本語を教える専門性が求められる。国語教育の延長では太刀打ちできない。それはプロの日本語教師の仕事である。

国に提案がある。日本語教育の水準を高め、日本語教師の社会的地位の向上を図るため、日本語教員免許証制度を創設してもらいたい。世界各国から多数の移民を迎える移民時代に入ると、プロの日本語教師が引っ張りだこになる。ふくれ上がる需要に即こたえられる日本語教師の養成は急務だ。

移民政策の成否は、外国人が日本の高等職業専門学校や大学に合格できる日本語レベルに達するよう、入国前と入国後に、日本語をみっちり教えるかどうかで決まる。そのためには、外国人に短期間にかつ正確に日本語の基本体系を教える日本語教育法の研究開発を急ぐ必要がある。

なかんずく、入国前に、現地の日本語教師が、現地のことばで、日本語の基礎知識を教える「日本語教育センター」を主要移民送り出し国に設置してほしい。また、日本語を学ぶ外国人が最も苦しんでいる漢字の問題を解決するため、外国人が簡単に漢字を覚える方法を専門家に考えてもらいたい。

日本語教育学の専門家には発想の転換が求められる。移民時代の日本語は日本人の独占物ではなく、世界の多くの人びとが学ぶ言語であると認識し、学ぶ側の立場に配慮した日本語教育改革を進めてほしい。

なぜ移民は日本文化のとりこになるのか

外国人行政を担当する国家公務員として、退官後は移民政策研究所の所長として、様々な国籍の外国人と接した経験から、日本という小宇宙には外国人を日本にひきつけ、外国人を日本化させる不思議な力があると感じている。一体どのようにして日本は外国人をひきつける魔力を身につけたのだろうか。なぜ在日外国人は日本文化のとりこになるのだろうか。

日本は古来、「人の和」や「寛容の心」を重んじる精神風土をはぐくんできた。多神教の日本人の心の奥底には多様な価値観や存在を受け入れる「寛容」の遺伝子が脈々と受け継がれてきた。長い歴史を経て外国人が日本に自然に溶け込む同化力の強い社会が形成されたのではないか。

知り合いの在日外国人は、信義を守る日本人、もてなしの心がある日本人、穏やかな人柄の日本人に敬愛の念を持っている。四季があって変化に富む自然、美しい田園風景、まとまりのある社会、安寧秩序が保たれた社会を気に入っている。アニメもファッションも料理も大好きだという。

移民の二世以降の世代が日本の小中学校で学び、出身国や民族による差別のない社会で成長していけば、生まれ育った日本に愛着を覚え、日本人と心が解け合うだろうと見ている。また、世界のどの民族も成功していない「多民族共同体」の樹立も視野に入ってくると予想している。

最近、私の立てた移民国家構想について多様な国籍の在日外国人と意見交換をしている。彼らは口をそろえていう。「寛容の心がある日本人は移民を上手に受け入れる」「日本人と移民が協力して多民族共同体を創成できる」。

そして、私のいう人類共同体ビジョン、すなわち、各民族が平和共存し、人類が一つになる「地球共同体思想」に対する熱烈な支持を語る。在日外国人の世界で移民国家ジャパン待望論が高まっていると感じる。

人類社会に純粋民族は存在しない

世界の多士済々が永住を希望する国に生まれ変わらなければ日本の明日はない。人口減少期に入った日本は、先祖代々の日本人だけで国家・社会・経済を運営する時代は終わった。

移民反対派の人たちは、移民が入ってくると、日本民族と日本文化の純粋性が損なわれると口をそろえていう。しかし、日本の歴史をさかのぼれば明らかなように、日本民族も日本文化も日本列島の中で生まれ、純粋培養されたものではなく、世界各地に由来するものである。海外から日本の地に渡来し、日本の中でいろんな要素がまじりあって形成され

たものである。

日本の伝統文化が外国人観光客をひきつけるのは、日本文化が世界各国の文化の精髓を取り入れた雑種文化の典型だからである。言語、料理、宗教、美意識、社会規範などの日本文化は、世界のどの民族も理解可能な普遍的なものである。仮に全然まじりけのない純粋文化だったとしたら、外国人観光客はそんな日本文化に共感を覚えないだろう。

およそ人類社会においてほかの民族の血がまったく混じっていない純血民族など存在しない。人類の先祖に最も近いとされる黒人の中にもいない。人類史は移動と定住の歴史であり、人類は異なる民族間の結婚と混血を繰り返して、現在の地球上に見られる多様な民族と国民に分かれた。

つまり、地球上に存在する民族のすべては移民の末裔である。すなわち雑種民族である。日本では1000年以上移民鎖国体制が続いたので日本人は比較的純血度の高い民族だが、それでも太古の昔から世界各地から移住してきた民族の血がまじりあって形成された雑種民族であることに変わりはない。

1000年後の人類社会を展望すると、地球上から地理的・国家的・文化的障壁は完全になくなり、異民族間の結婚と混血が世界的規模で爆発的に増えた結果、人類の多数が人種的に単一のものに近づいているだろう。それは一つの種から進化した人類の先祖返りであり、人類の理想像といえる「地球人」へ向かう道である。

人類共同体思想は日本の精神風土のたまもの

日本型移民国家構想のような日本の国家ビジョンが世界の注目の的になるのは非常にめずらしいことではないか。世界の知識人は私の移民国家理論のどの部分に関心が高いのだろうか。

外国の知識人と討論した感想をいえば、日本民族をはじめ世界の諸民族がうちとけて一つになる「人類共同体社会の創造」を提案している箇所ではないかと思う。たとえば、昨年4月、私の講演を企画した南カリフォルニア大学日本宗教・文化研究センターのダンカン・ウィリアムズ所長は、移民国家・日本の未来像を描いた私の著作を読み、「真の移民国家ビジョンを提示したもの」「日本の伝統的精神風土から生まれたもの」との感想を述べた。

世界の移民政策の専門家は、人類の多様性を強調し、多文化共生を目標に掲げる。いっぽう私は、人類の同一性を強調し、人類が一つになる地球共同体の理念をうたっている。

それは、世界の模範となる日本型移民国家の建設、地球規模での人類共同体社会の形成、さらに恒久的世界平和体制の構築を目ざすものだ。近未来の地球社会を見据えた坂中移民国家ビジョンは世界の識者から衝撃をもって迎えられたようだ。

一例を挙げる。2010年11月、世界経済フォーラム主催の「移民に関する世界有識者会議」に出席し、「坂中英徳の『日本型移民国家宣言』」の表題の論文について専門家の批判を仰いだ。すると同会議の議長を務める移民政策研究の世界的権威のデメトリー・G・

パパデメテリウ氏から、「あなたの論文は私がこれまで読んだ移民政策分野のどの論文よりも新鮮で創造力の豊かなものである。なぜなら、移民の受け入れと社会統合という両立しがたい難問を解決しようとしているからです」との過分の評価をいただいた。

人類は多様な人種と民族に分かれているが、人間の大本は一つである。人間の根の部分の文化と価値観は共通するところが大部分である。もとより、人類は生物分類学上は単一の種に属し、相互にコミュニケーションでき、相互に共感し、相互に理解できる存在である。

文化を共通する種としての人類の本質に照らすと、日本が世界初の人類共同体の実現を国家目標に定めても、それは決して夢物語ではない。時間はかかるが、国民が総力を挙げて努力すれば、それを成し遂げることも夢ではないと考えている。

「人類は一つである。人種や民族の違いはあっても同じ人間である。文化や価値観の違いはあってもわずかである」という普遍的人間観に基づき、世界にあまねく通用する日本型移民国家体系の完成に全力を傾ける。

日本の豊穡な精神風土のたまものである移民革命思想が世界中に広まり、世界の人びとを導く星として煌めく時代に思いをはせている。